

火星



平成17年 6月号

七曜抄 二

山尾玉藻

からつぽの濡れてゐるなる白魚桶

連翹の家の式台冷えゐたり

牛飼に葉桜の道ありにけり

大鯉を八十八夜の草の上

袋角見てはいけないもののやう

友引の日の花柚子の匂ひけり

梅雨蝶の爪先立つてゆくごとし

麦秋の只中を来る割烹着

麦秋や畳に母のベッド跡

大風となる一つ葉の巖かな

太白星

柳生千枝子

口ひらく五人囃のひとりのみ
雛飾り了せて縁へ戸をひらく
臘梅や夕べほのかに星生まる
春寒し灯りともして船が航く
夕雲の朱色おび来し春の航
囀りや義弟の既に骸なる
春の川ひかりが走る児が走る

杉浦典子

投函を夫にたのみし春の雪
海苔舟のふたりの影の浮いてきし

亀石のとなりの畑のアスパラガス
花の昼鬼の雪隠日かげりぬ
誕生日過ぎてをりたる桜かな
馬小屋に人ごゑのせり涅槃西風
落椿日の差す窪にかたまつて

浜口高子

初音なか運ばれきたる手桶膳
桃の花言はれてみれば日曜日
ふらここの引くとき我の遅れけり
山くらげ咽を通る霞かな
発掘の四隅にありし春の水
東京がふるさと言ふ豆の花
裏道を外れし裏道囀れる

火星作品 山尾玉藻選

桃咲いて厨大きき使ひけり
大和郡山 城 孝子

草餅や宿の畳に傘干して

ぼうたんの芽に日の重さありにけり

春風やみな竹の杖持たされて

かげろうてかげろふ舟に乗りにけり

銀の匙ならべありけり難の間
八幡丸山照子

携帯のこゑが寝釈迦の背中より

纜の藻のみどりなる彼岸西風

飛火野にパワーシヨベルや鳥帰る

透明な傘をひらきし仏生会

浅蜷掘る穴にときどき指洗ひ
穴栗田中英子

潮干潟ふたりで遠く見てゐたり

うしろへとうしろへと春耕しぬ

スクランブルロードにまぎれ遍路鈴
緋目高の水より昏れし二上山
春雨に濡れたる墓をまた拭けり
鳥交る石屋の土間のまくらがり
春荒の名残のしづく男山
摘草やけふ二上山のかはゆかり
マンモスを見に行く春のシヨールかな
大阪に住み馴らされし春の宵
用ふたつありし多忙の長閑けしや
彼岸会やふつつとあり吾が力
春灯や老の転びの軽からず
如月を病む友のゐてじつと見る
活花の残り挿木に雨催
苗札の字の相似たる親子かな
涅槃雪ビルの前庭灯りをり
祖父祖母と曾祖父祖母が雛の客
げんげ田に下駄あり誰もをらずなり

八幡 大山文子

大阪 加藤君子

八幡 波田美智子

選のあとに

山尾 玉藻

な行為を逃さず捉えた所にある。

如月を病む友のゐてじつと見る

加藤 君子

銀の匙ならばありけり雛の間

丸山 照子

この「銀の匙」は買った物ではなく貰い物、普段は使う訳にもいかず仕舞ってある匙。雛飾りと一緒に並べようという家人の発想が面白く、読者も大いに納得する。「銀の匙」は雛と同等なのである。同時発表作へ纜の藻のみどりなる彼岸

西風」の季語「彼岸西風」が良く、この句も秀逸である。

浅蜷掘る穴にときどき指洗ひ

田中 英子

実際に浅蜷掘りを長時間やってみると結構大変である。普段と違う姿勢は疲れやすい。「ときどき指洗ひ」は一息入れる時でもある。この後、遠くの景色にも目を遣るのであろう。

春雨に濡れたる墓をまた拭けり

大山 文子

春の彼岸の景であろう。墓掃除も終わり、手を合わせる頃に雨が降ってきたのである。それも日照雨のような僅かな雨だったのだらう。たまに訪れて折角洗ったのと言う気持ちの現れが、「また拭けり」である。掲句の手柄は、この些細

同じホームに住む友人を見舞われた時の句であろう。毎日会っていた方が病んでおられるのだ。「じつと見る」に病がかなり重い事が解かる。それと同時に、否それ以上に「このじつと見る」は自分自身の身を重ねておられる表現となっている。季語「如月」も一句に張りを与えている。

涅槃雪ピルの前庭灯りをり

波田美智子

最近の高層ピルの大方に立派な「前庭」が設えてある。ビルを背後に「前庭」の照明の中に春の雪が降っていて、ちよつとした佗しさが美しさを増長する。「ピルの前庭」と言う物に対し季語「涅槃西風」は動かない。

花御堂鳩の足音してゐたり

松 たかし

この「花御堂」、在所の山の中腹辺りのものを想像する。四月八日の午前中、まだ子供達の姿はなく、接待の人が二三人いるのみだったのであろう。「鳩の足音してゐたり」ほどの静けさだったのである。「花御堂」からちよつとずらした所にこの句の独自性がある。(以下略)

同人 I

長屋璃子

恒星圈

戸栗末廣

野澤あき

花冷の海豚見て喰ふ握り飯
柳絮とぶ海が光れば海へ向き
浦まちの銀座通りの朧かな
ぶらんこのすぐに飽きたる子守かな
黝かりし石垣島の牛の虻

初ざくら外人の棲む庭にかな
花吹雪いまも母校に金次郎
さくらさくら住めば都となりしかな
よちよちの子の手の届くしだれ梅
春の昼「ろくでなし」てふ唄ながれ

戸田春月

廣畑忠明

長閑さよD51に乗る晴れ男
東寺餅みんな手摺み彼岸婆
鳥羽離宮隅から隅へ陽炎へり
遠出する波止場生れのうかれ猫
海神の上機嫌なり白子干す

園児らの列の背丈や花菜畑
畑打の畝を歩ける鴉かな
菜の花や貨車長々と河渡る
雨ながら空の明るき残り鴨
池の面に雨滴ぽとりと楓の芽

獅子座

山尾玉藻推薦

波田美智子

お花見の話まとまる外科医院
囀の降り来る中にバスを待つ
沈丁花嫌ひと言うて微笑めり
百千鳥三時のお茶に嬰囀み

加藤君子

春雷の止むやたちまち通天閣
春禽の我に気付けば高鳴きす
出る事をためらつてをり彼岸西風
春灯や九十の後の年いくつ

高松由利子

種物屋阿弥陀のやうな耳であり
まづ厩ひと廻りして大試験
はこべらや団子汁出す朱のたすき
大釜を伏せある路地の春の月

高橋芳子

両肩に芽吹きの闇の重さかな
梅畑のレールの先の鳶の空
松明に松明の蹤く水臙
粕汁に烟臭き人集まり来

大塚のぼる

雛人形飾りて仕舞ふことをせり
土筆摘む阪急ホテルの裏の径
花の下杖を忘れて来たりけり
佛壇より下げてひとりの草の餅

村上留美子

坂がかりに接木苗売る馬籠宿
鮎子を求む列より手を振らる
土産屋の灯に寄り来春の鹿
初蝶や広場の遊具一巡り

丸山照子

豆畑を抜け涅槃図に來たりけり
彼岸会の海峡にさす橋の影
父が母を呼んでゐたりし接木かな
水軍の島に廻せる春日傘